川を活かした人づくり、まちづくり 第2回

いま全道各地の河川では、川を活かした学習活動やまちづくり活動などさまざまな分野で、行政とも連携しながら多くの市民団体が活動しています。地域でこうした活動を実践している方々に、「川と人づくり、まちづくり」をテーマにお話していただき、これからの川づくりにつなげていきます。

みんなでつくろう尻別川のルール

尻別川川の情報館

牧野 純二 氏
ＮＰＯ法人しりべつリバーネット理事長

インタビュアー
真砂 徳子 氏
フリーアナウンサー

真砂　牧野さんは、2000年５月にNPO法人として再出発された「しりべつリバーネット」の理事長をなされていますが、こうした活動に関わられたきっかけ、動機はなんだったのでしょうか。

“流域自治”の考えに基づいて…

牧野　リバーネットは社会の縮図で、さまざまな人がいます。1997年に設立して以来、活動の基本的な考えは「流域自治」という概念です。

これまでのまちづくり、地域づくりは、どちらかといえば公共的な機関や自治体を中心とする開発でしたが、いまは生活者を中心に考えていくということから、河川流域の水環境問題がクローズアップされました。その状況のなかで流域のさまざまな人たちと水環境についてシンポジウムや話し合いが続けられてきました。そうして、国や自治体だけに頼っての地域づくりはできない、流域におけるさまざまな地域づくりと問題の解決を住民主導で進めていこうと、「流域自治」という考えに基づいて設立されたのが、リバーネットです。

真砂　そのときの具体的な問題点というのは、どんなことだったのですか。

牧野　河川を考えると、例えば川の情報館が建っているこの地域は１級河川の直轄区間で、尻別川の本流と支流の一部は国の管轄です。蘭越の上流域は北海道が管轄し、さらにその支流の普通河川は市町村が管理しています。河川は個別管理ですが、河川の水環境を考えれば一つです。ですから地域づくりで生じる問題を解決していくためには、流域に住む人たちが手を取り合って、参加の機会を持ち、情報交換しながら活動を進めることが重要です。それが流域自治の基本です。

リバーネットは、発足当初から情報公開して流域住民の参加の機会を設け、人々のネットワークをつくり、河川に関するさまざまな問題、あるいは進め方についての情報を伝える役目を持ち、地域の声を行政あるいは管理者へ十分に伝える仕組みをもとに、地域の方向づけ･将来像を一緒に考えるという三つのことを行ってきました。

真砂　川べりで遊んだり、山で追いかけっこしたり、同じ環境で過ごしている方々が自分たちのまちや流域のことを考えると、行政区画で考えるよりもかなり幅広い柔軟な考えが出てくるのではないですか。

牧野　尻別川流域に人が住んでからずっと洪水や氾らんが起ってきました。地域住民の人たちが生活をするためには、さまざまな問題を抱えています。環境の保全とともに、地域住民の生活を守るということの両立を考えなければいけません。

例えば、国の管理区間では洪水対策の築堤工事はほぼ終わっていますが、下流域の洪水対策だけでなく、上流域でもっとできることがないか。あるいは、安全確保のための治水工事で下流域の人たちの身近に川と接する機会が少なからず失われてきましたが、上流域の私たちも、そのことを踏まえて河川環境を考えることが必要です。

それらを解決していくためには、上流域から下流域までを見渡して、できるだけつながりを考え、進むべき方向を見つけることが一番重要だと思います。また、子供たちへの教育、大人たちがもう一度川に接する機会も必要です。農業を中心に発達したこの地域ですが、観光を考えると川の利用や、今まで行政の課題にあげられなかったことが出てきています。

どの首長さんも国や道においても横断的に行政運営を行う方針を出されていますが、現実的には十分な横のつながりはまだできていません。それを批判するだけでなく、流域住民自らが広域的な視点でどうすべきかを言葉や文書にきちんとまとめ上げ、国や自治体に伝えることが重要です。

真砂　普通に考えても、川のどこかで汚染が始まれば、下流全部が汚れてしまうということですものね。ところで、こういった活動に取り組もうと思われた具体的なきっかけはあったのでしょうか。

牧野　私の生まれはニセコ町ですが、よそに行っていて二十歳半ばで戻ってきて、自分がこれから生活をするこの地域に何か役に立ちたい、もっとこうしたらいいのにという思いから、さまざまな地域づくりの活動にかかわり、そこからニセコ町だけでなく、後志の皆さん方とのさまざまな交流が生まれ、自分たちだけで解決できない問題があるということから流域全体を一つの地域づくりとする活動に入ってきました。

リバーネットの活動を支える人々

真砂　活動を始められて、ここはよくなったという点、あるいは難しいと思われている点がありましたら教えていただけますか。

牧野　リバーネットができ、今年でちょうど10年になります。誇れる地域になってきたと実感していることが一つあります。流域人口３万7,000人の１％といえば370人ぐらいですが、これは私たちの活動で雪中植林や河畔林植林をするときの参加者人数に相当します。あるいは、ごみ拾いも近年は300人を優に超える皆さん方が集まります。また、小学校、中学校、高校で河川環境にかかわるさまざまな取り組みが開始されています。流域人口の１％の人たちが河川環境活動に参加し、学んでいるという状況は、全国でもトップクラスと思います。10年の活動が子供からお年寄りまでの流域住民に尻別川を再認識させ、川との向かい方、おつき合いの仕方を変えてきたといえます。

もう一つの難しい面ですが、ニセコ地域は特に北海道の中でも一、二番という観光産業が発達している地域です。尻別川では現在、10万人を超える観光客が何らかの形で川とのかかわり合いを持ち、川そのものが観光の重要な地域資源として認識されています。その中で自然を守ること、川とのかかわり方が全国のどの河川よりも速いペースで変化してきています。先日も、北海道が行う治水工事についてもう少しどうにかしてほしいという要望が寄せられ、川の健全な管理方法と進むべき方向を探るために、新たな会議を立ち上げたところです。

これまで私たちと一緒に流域のさまざまな活動に参加してきた人たちは治水と自然環境のバランス感覚を比較的持っていますが、新しく移り住んできた人たちにはまだ十分な情報が伝わっていないということがあります。一緒に考えるための情報をきちんと伝えていくことが、多くの課題を解決するためには一番大事なことだと思います。

ルールは規制ではない！

真砂　そういったルールを広めていくのにもいろいろと困難なことがあるのではないでしょうか。

牧野　尻別川のルールづくりは、当初からリバーネットの重要な課題として取り組んできました。関係町村、電力会社、カヌーやラフティングの事業者、釣り人など、多くの人たちに参加してもらい、どうあるべきかという議論を進めてきました。これらは流域７カ町村の首長でつくる尻別川連絡協議会に真摯に受けとめていただき、流域の町村がそれぞれ趣旨や目的などを合わせた条例を制定

尻別川統一条例

河川環境の保全に関する条例

（前　文）

北海道の南西部の広大な森から湧き出た、いくすじもの流れを集め、秀峰羊蹄山、雄大なニセコ連峰の麓をぬい、日本海に注ぐ尻別川をはじめとする清流。

わたしたちは、この流域に住み、多くの川から限りない恵みを受けてきました。

川は、その悠久の歴史をつづりながら、流域住民の生命の糧となり、耕土を支え、固有の風土と文化を育み、生活に潤いと調和をもたらし、限りない恵みをわたしたちに与えてくれています。

わたしたち尻別川流域７町村の住民は、この美しく豊かな河川環境を貴重な共有財産として守り、育むとともに、将来の世代がその恵沢を享受できるよう大切に引き継ぐ使命があります。

ここに、わたしたち町（村）民は、衆知と総力を結集し、尻別川流域７町村の一員として尻別川水系の川の美しさと豊かさを守ることを決意し、この条例を制定します。

するという、現在の尻別川の統一条例に結びつきました。

しかし、統一条例はできましたが、「ルールというのは規制ではない」ということです。一度規制をつくればそれでいいかといえば、そうではありません。それに基づいてどんなことをやっていけばいいかです。また、川の利用ルールは、これからも永遠のテーマとして持ち続ける必要があるものです。まだまだ未完成です。

真砂　「ルールは規制ではない」とは、具体的にどういうことなのでしょうか。

牧野　例えば、川も道路も公共物でだれでも自由に使える共有財産です。法律上はだれもが自由に使えますが、尻別川が本当にそれでいいかといえば、そうではない。つまり、仮に法律で規制するようになれば、それによって地域の個性が失われることもあります。日本全国どこにでも川はありますが、それらすべてに画一の規制が当てはまるかというと、そうではありません。北海道の場合は、特に各地域の特性に合った地域づくりという面の要請が多くあります。

そう考えると、尻別川の統一条例は、極めて緩やかな形でまとめていて、この地域の進むべき方向性をきちんと表していても、決して規制的な概念はありません。ないのですが、やはり守られるべき、きちんとしたルールが必要で、そのためにはこれからも多くの議論が必要だと考えています。

真砂　確かに一律の扱いだとなかなか地域独自の魅力は生きてこないですよね。自分たちの持っている財産を生かしていこう、川を通してそのような取り組みをしていこうということなのですね。

牧野　そうです。

真砂　牧野さんは、他にもさまざまなまちづくりにかかわられておられますが、それらの活動を通して、「まちづくり」について思うことはありますか。

どの活動も思いは一つ

牧野　私にとってはいろんな活動をしているというのではなくて、頭の中では一つです。リバーネットは、シーニックバイウェイ北海道にも取り組んでいます。これも流域自治の観点から取り組んでいるわけです。景観や環境、あるいは観光の発展を考えると川も重要です。川や山を守るには周辺のさまざまな産業も非常に重要です。私にとっては、景観、環境、観光、いろんな活動は全部一つで考えています。それが「流域の社会」です。人が住むからにはすべてが関連しているということです。

真砂　こういった活動の意義は、どんなところにあると思いますか。

地域での豊かで楽しい生活が目標

牧野　私自身が住む地域で豊かに楽しく生活したい、この地域で豊かさを感じたまま最後はあの世に行きたい。また、自分たちの子供たちが、この地域に戻ってきて心身ともにリフレッシュして、また自分たちの生活に帰れる環境があること、私と一緒にいろんな活動をしている人たち、知人や友人が幸せにこの地域で生きていけることが自分の幸せにもつながる、ということが根本にあります。ですから、この活動はだれかがやってくれるものではなく、自らが行うべきだと考えています。

国やよその地域の知的な人たちが提案してくれたり、知らない間にいろいろなことをしてくれていた時代もありましたが、地域に住んでいる者しかわからないことも多くあって、その文化や自然を守り育てていくことが持続的な地域づくりにつながることを考えると、やはり流域住民自らが先頭に立って活動していくべきと思います。

真砂　50年後、100年後の自分たちの住んでいる地域を見すえて、足元からこつこつとやられておられるんですね。

牧野　そうですね。他地域から「やっぱりあそこの地域は違う」と思われなければと思います。

国際化の進む中でのルールづくり

真砂　尻別川は全国のカヤッカーあこがれの場所でもあります。ニセコ地域自体もオーストラリアからたくさん人が来たり、世界中から注目される場所になっていますよね。そういった中で、皆さんの活動では今どんな課題があるのでしょうか。

牧野　京極町、倶知安町、蘭越町、喜茂別町、留寿都村、真狩村、ニセコ町を合わせて「ニセコエリア」と呼んでいますが、今では国際化がどんどん進んでいます。アウトドアスポーツに従事している外国人の方もすごく多くなってきています。

これまで進めてきたルールづくりは、日本的感覚のルールでした。しかし、法律に明記されていないからやっていいのではないかというような内容が実は数多くありました。例えば、動力式のボートでの観光遊覧計画、尻別川源流域の1000m級の山に雪上車でお客さんを運ぶという話などがありました。これらはいろいろな問題があり、私も何度も足を運び話し合いを持って、一時保留あるいは中止の形を今はとっていただいていますが、実は法律的にはだめではないのです。

これからの国際化で重要なのは、明確なルールがきちんと啓蒙・普及されて、観光の本質である景観や自然環境を守るということをどう基本にしていけるかということです。そうした基本を前提に他地域より高く売られている農作物などがあるわけです。これからは日本人的感覚だけではなく、世界に通用する仕組みとしてルールをつくり上げることが必要です。

そういうと、外国人は規制があればやらないという契約的発想でとらえがちですが、決してそうではありません。ニュージーランドやオーストラリア、アメリカを見ても、実は規制はしていません。「地域の中でのルール」という合意形成による地域が数多くあります。その仕組みを自治体や河川管理者も含めて、きちんとしていく必要があります。それには、これまでの行政の進め方の延長線上ではなく、まったく新しい発想がなければ、個性豊かな流域づくりは進まないと思います。

真砂　その新しい発想を今の取り組みでつくることができたらいいですね。

牧野　それが見えるようになれば大したものなのです。

真砂　外国の方も含めて、この地域に来てくれる人、それから住んでいる人が豊かで楽しい気持ちになって、かつ、環境や自然が守られるということを実現させていくためには何が一番大切ですか。

牧野　自然環境や景観は地域に育てられ、維持されて観光の発展に結びついています。ですから、絶対的にやめることはできません。したがって、地域の農業者など住民への情報公開と、その人たちの多くの声を聞いて、その情報をまたみんなが共有する仕組みが一番重要だと思います。

真砂　地域の共通意識をより多くの方に持っていただくことですね。

リバーネットをはじめ、さまざまなまちづくりの活動を今後どう展開していこうと思われますか。

住民と行政との間の橋渡し役

牧野　シンポジウムや検討会議などを通じて、住民に情報を伝え、声を聞くという機会が少なくなると、すぐに問題が発生することを最近感じます。表には見えなくても、今まで以上に流域住民との話し合いを行い、行政からの情報もいただき、相互にそれらを伝える仕組みづくりを活発化していかなければいけないと思っています。

真砂　インターネットなどの情報通信技術を駆使した情報の広げ方だけでなく、顔と顔を見合わせ、声をかけ合って意見交換し合う情報の伝え方を重視しているということですね。

牧野　人は本来、相手の顔でニュアンスを見てコミュニケーションするところを、携帯やメール、インターネットの普及で、そうした生の感覚が失われて誤解や不信を招いています。

これは流域のさまざまな問題にもかかわります。例えば、河川の維持工事情報では、国や道、市町村は個人の問い合わせに全部答えなければいけないという状況です。行政コストや本当の民意反映視点からは、個人の意見と地域全体の意見がどうバランスよく反映しているかが大事ですが、現状は極めて懐疑的なこともあると感じています。リバーネットは、この10年間で流域人口の半数以上が何らかの形でかかわった団体に育っていますので、行政を補足し、そういった問題を受けとめる仕組みをしっかり考えて、真の地域づくりをしたいと思っています。

行政とのパートナーシップ

真砂　行政とのパートナーシップを大事にするということですね。

牧野　一時、市民団体は国や道、市町村に対じして活動する雰囲気がありましたが、実は国や道、市町村には自分たちの税金で仕事をお願いしていると考えれば、表裏一体です。そのことを理解した上で自己責任をきちんと考え、本来の住民自治の概念に戻って地域づくりを進めることが重要な時代になっています。

1997年の河川法改正以来、さまざまな場面で法整備がされ、流域住民、国民とのパートナーシップや計画段階における意見聴取も義務づけられています。しかし、住民側に受けとめる仕組みが十分できていません。また、行政でもそれをどう実施するかが未発達ではないのかなと見ています。これをきちんと実行しなければ、真に誇るべき流域社会の実現は難しいと思います。

真砂　今後の社会資本整備はどうあるべきか。期待することやアイデアがありましたら教えていただけますか。

牧野　国はこれまで国民の生命・財産を守ることを第一にしてきましたが、今回の河川法改正で河川環境の保全に一歩踏み込んだ形になっています。しかし、法律に盛り込まれた趣旨に基づいて、現実の河川行政が行われているかといえば、まだ発達途上にあると思います。社会資本整備の次の段階では税の公平な使われ方がきわめて重要なことです。流域住民も使われ方をきちんと見て、理解しなければいけない。ただ、全国一律では個性豊かな流域社会の実現は難しい。では、自分たちが何を求めるか、一つは流域の住民がきちんと方向性を出すことです。尻別川の統一条例がそれです。もう一つは、景観法に基づいて流域全体を指定地域にしますが、景観についても地域の意思をしっかり出します。景観や環境を河川のさまざまな維持工事で前面に出して初めて、全国のどこにもない新たな仕組みができます。そうした尻別川のスタンダードとしての仕組みづくりが必要です。

真砂　ここでの取り組みが、まちを美しくしたいというほかの地域の方々にもどんどん伝わっていけば、北海道も日本も美しくなるでしょう。そうなればとてもいいですね。

牧野さんが考える、この流域の未来予想図は？

牧野　尻別川が今年も清流日本一になりましたが、住む者の心も清流日本一にふさわしい心を持って、自然や人間関係を大切にし、行政に任せるだけでなく、常に自分たちが何らかの形でできる範囲で参加する地域づくりが進めば、ホスピタリティー豊かな、自然環境の美しい、世界に誇れる流域社会が実現できると思います。

真砂　ここに来るまでにも、羊蹄山を見て「ああ、きれい」と写真を撮ったり、尻別川の流れを見て「やっぱりいいね」と、北海道に住んでいながらも、目にして初めてわかる美しさやすばらしさがたくさんありました。インターネットなどの情報に偏ると、本当の良さがなかなか伝わらないと思います。地域の美しい心持ちも、来てくれた方が皆さんと話したり触れ合うことできっと伝わると思いますので、もっともっとすてきな魅力をこの活動で発信していただければと思います。今日はどうもありがとうございました。

（本インタビューは、平成18年10月４日に蘭越町にある尻別川川の情報館で行いました）

尻別川の風景

profile

牧野 純二　まきの じゅんじ

1960年ニセコ町生まれ。'80年北海道建設専門学校卒業後、牧野工業株式会社入社、現在取締役専務2000年からＮＰＯ法人しりべつリバーネット理事長。㈱ニセコリゾート観光協会常務取締役、ニセコまちづくりフォーラム理事、産消協働推進道民会議、北海道美しい景観のくにづくり審議会委員など公職多数。

真砂 徳子　まさご のりこ

埼玉県出身。明治大学文学部卒。新潟テレビ21アナウンサーを経て、北海道に移住。ニュース、バラエティ、情報・教養番組などテレビを中心に幅広く活躍。2005年独立し、真砂事務所を開設。